

だか木の枝に袋がぶら下がったものが居る、は大方賊どもが忘れて行つたのだと思ひながら取つて開けて見て又驚いた。其中には大判だの小判だの取り交せて何百兩とも知れぬ大金が這入つて居たのである。

そーこーしてゐる中に、ぼつ／＼東の空が白みかかつて、あちらこちらの森に鳥の鳴き聲が聞こえて来た。もう大丈夫と思つて商人はそこを立つて出たが、今度は下り坂である上に、夜が明けてゐるから歩行くのも早い。急ぎに急いでとう／＼お正月の元日に家へ着いて、家内の者共に途中での事を話しをして、すぐ其金を靴上へ届けた。するとお上でも、これは盗賊どもがどこで取つたのか分らん金だから、お前が正直に届けて出た褒美に下げ渡してやるといふので、何百兩とも知れぬお

金が計らずこの商人の手に入つた。生命を助かつた上に、此大金が手に入つたので、たいさへおめでたい元日に二つも三つもお芽出たが重なつた。

それからこの商人は、夫を資本にして商賣を大きくしたが、だん／＼と儲かつておしまひには非常な大金持になつたが、今でも其時の難儀を忘れない様に、其家のお床の前にチャーンと其時の白い鬚の生けた赤顔の鼻の高い天狗の面を祭つて居ますとさ、めでたし／＼

一口ばなし

奥様「これに鍋や、靴前は近頃田舎から来たのだから、兎角物言ひが悪くって行けませぬ。これからよく氣を付けてね、物を言ふ時には始終「お」の字をつけてお言ひなさいよ」

言ひ聞かされて お鍋は裏の方へ行きまされたが

暫くすると わはたいしく駈けこんで来て

お鍋 『奥様 奥様 今ね お鳥がね お裏に干し

といた お麥をね 大勢でみんなお食べて居ます

よ』
奥様 『そーかい 追うておやりよ』

お鍋 『はい 畏まりました』

といつて裏へ出て

お鍋 『おはー おはー』

謎

前號の解

(一)鉛筆とかけて 兎島高德ととく

心は 木をけづつて字をかく。

(二)上手な自転車乗りとかけて、 啞の物語ととく

心は 手話し(手放)がうまい。

考へもの

坊ちゃんや嬢さんや 私を御存じですか、私は

身体中、金で、そして まことに小さな小さな

そーです まー曲尺で三分もありましょーか、餅

し人の行く所なら 野でも山でも學校でも幼稚園

でも どこだつて行かぬ所がありません。ですか

ら身体が小さくつても 一日に七里でも十里でも

歩きます瀧車でしたら 百里でも行きます 但し

皆さんの歩行くのと違つて 頭を下にして行きます

すよ さーあてゝごらんなさい。

